Eureka XII

六年制通信 No.27 令和6年11月15日(金)号

ユーモアは清涼剤

最近フェデリコ・フェリーニの「道」(La Strada)を観る機会があって改めて感動しました。古い古い白黒の映画ですけど、初めて観た時よりも今の方が考えさせられましたし、フェリーニの意図と言いますか描きたかったテーマも理解できたように思います。重くて深いテーマですが、主人公のジェルソミーナのユーモラスな場面にホッとします。あれを観ているとチャップリンの言うユーモアとペーソス(悲哀)の一体感のようなものがよくわかります。名作と言われる昔の映画はやはりいいですね。若い君たちにも観てほしい映画がたくさんあります。例えば「カサブランカ」、ま、これはイングリッド・バーグマンが世界一美しい女優さん(ちなみに第2位はオードリー・ヘップバーン、第3位はビビアン・リーです。誰が何と言おうと、はい)だから観たわけですが、面白いセリフがありますね。女が尋ねる「昨日の夜はどこにいたの?」男が言う「そんな昔のことは憶えていない」、「今夜会える?」「そんな先のことはわからない」、何というキザなセリフか!とてもじゃないが恥ずかしくて言えませぬ。背中が痒くなりますよね。ハンフリー・ボガードだから許されるのでしょうか。わりと深刻な映画なのですが、こういう少し笑えるシーンが私は好きです。エリック・シーガル原作の「ある愛の詩」も名作です。最後は悲しみに包まれるお話ですが、二人の出会いのシーンで交わされる会話が秀逸で私は大好きです。金持ちで優秀な男と貧しい音大生の図書館での口喧嘩です。原書は図書館にあります。私、訳してみます。「あなたはバカでお金持ちに見えるもの」「実は僕は頭がよくて貧乏なんだよ」「頭がよくて貧乏というのは私のことよ」「一体なんで君が賢いって言えるんだよ」「私はあなたみたいな人と珈琲なんか飲まないもの、絶対」「ふん、僕は君を誘ったりしないよ、絶対」「だからあなたはバカなのよ」、いかがですか。映画では最後のセリフを言う時のアリ・マッグローがチャーミングすぎて、ありや惚れますわな。君たち、こんな会話をしたいと思わないですか。大人になったら立派な紳士淑女になって、ウィットやユーモアのある会話を楽しめるようになってくださいね。

私は現代の病だと思っているのですが、人間関係に潤いが足りないと言いますか、何か嫌なことがあってもユーモアに包んでやり過ごすということを忘れてしまったと言いますか、誰もが他人の失敗を咎めることに躍起になっていると言いますか、ちょっとしたことでキレる、いきり立つ、逆上する、食ってかかる、何かあると目を吊り上げる、目くじらを立てる、ほんの些細なことでも思い通りにならないとそれに対するリアクションが異常に激しすぎる、そんな風潮がありはしませんか。

ユーモアは一服の清涼剤と教えたのは昔の日本海軍だと阿川弘之の本にあります。軍隊にユーモアは合わない気もしますが、確かに緊張で硬くなって神経がコチコチになると正しい判断はできないでしょうから、ゆとりを持った精神を保つにはユーモアは欠かせないと思います。穏やかな眼差しが実は強健な精神を表すのとは逆に、いきり立つ目つきは精神の脆弱さを示していると思います。心のゆとり、ユーモアを意識して生活していきたいものですね。周りをよく見れば、あるいは自分自身を観察すればユーモアの種はいっぱいありますよ。チャールズ・ラムの「我、愚人を愛す」の愚人とは、周りからは滑稽に見えるが本人は大真面目であるような人のことですが、君の周りにもいるでしょ。君自身がそうかもしれないし。初めにチャップリンに触れましたが、是非観てほしい映画を四作品挙げておきます。「街の灯」(City Lights)、「モダン・タイムス」(Modern Times)、「独裁者」(The Great Dictator)、そして「ライムライト」(Limelight)です。ちなみに今苦しくてユーモアどころではない人には、「喜劇とは悲劇に時間を加えたものに等しい」という言葉を贈ります。たいていの失敗は時がたてば笑い話になるという意味ですよ。

今週のおすすめ

・下村敦史 『白医』 (講談社文庫)

これは考えさせられます。考えすぎて疲れます。テーマが安楽死ですから。違法な安楽死を行ったとして起訴された神崎医師。裁判で神崎は何も語らない。弁護士として現れた老人の驚きの告白。どれも重い。特にこの老人のことを一体誰が裁けるというのか、私ならただただ沈黙してしまおうと思いました。全編を通して、神崎医師を告発した医師、看護師、緩和ケアに入院している老女や元刑務官たちの言葉が綴られていくわけですが、何が正しくて何が間違っているのか、責められるべきは誰なのか、容易に判断できる問題ではないですね。この問題は読んだ年齢で感想がずいぶん違うだろうと思います。名作ですね。

安楽死と言えば森鷗外の『高瀬舟』を思い出す人もいるでしょう。余談ですが私はあの小説で「鳥目」と書いて「ちょうもく」と読み、意味はお金のことだと知りました。昔の硬貨は真ん中に穴が開いていて、それが鳥の目に見えたからだそう。病弱な弟が兄の負担にならないようにと自殺を図り、死にきれず、兄にとどめを刺してくれるように懇願する。苦しむ弟を殺した兄は遠島の刑に処せられ、高瀬舟に乗せられる。その船の中での役人と主人公の会話がこの作品のメインです。役人は事の次第を聞くと、この男を罪に問えるのかと悩みます。しかし結論を出せないのですね。

映画「世界一キライなあなたに」も安楽死がテーマです。これ、観てほしいなあ。原題は *Me Before You* で、私はこの洋書を持っていますが、まだ全部は読んでいません。スイスでは、条件は当然あるでしょうが、安楽死が認められていることをこの映画で知りました。そう言えば、最近イギリスで厳しい条件はあるものの安楽死の法案が提出されるとの報道がありましたね。君たちはこの問題をどう思いますか。

BGMは 野田愛実 の 明日 でした…。